



ナガサキ ピース・タイムズ

発行者【PUBLISHER】
日本非核宣言自治体協議会
(にほんひかくせんげんじちたいきょうぎかい)
〒852-8117 長崎市平野町7番8号
長崎市 平和推進課内
電話 095-844-9923 FAX:095-846-5170
E-mail info@nucfreejapan.com
ホームページ http://www.nucfreejapan.com

NAGASAKI PEACE TIMES

【非核協】おやこ記者新聞



純心女子高等学校による被爆50周年記念歌『千羽鶴』の合唱

被爆70周年の誓い 未来の平和をこころ長崎から

平成27(2015)年8月9日、被爆70周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が長崎市平和公園で行われ、全国各地から集まったおやこ記者9組も参列しました。会場には被爆者やその遺族をはじめ国内外から多くの参列者が集まり、原爆犠牲者を追悼し、平和への誓いを新たにしました。

【編集部】



今年参加した9組のおやこ記者と田上会長(長崎市長)



世界子ども平和会議

8月5・6日、122の国や地域の子どもたち、長崎市と福島県いわき市の中学生などが参加し、原爆の恐ろしさや平和の尊さを学ぶ世界子ども平和会議が開かれました。「過去を学び、現在を見つめ、明るい未来を描こう!」をコンセプトに開催されたこの会議では、原爆資料館の見学や被爆体験講話の聴講で「過去」を学び、参加国の現状報告や核兵器の講義などを通して「現在」について考え、グループワークで「未来」

「世界子ども平和会議」開催



グループワーク

について意見を交わしました。参加した子どもたちにより、長崎の平和の願いが世界中に伝わることを期待します。

【編集部】

70年つづく 長崎の平和への思い

— 平和祈念式典へ参列して —



私は初めて長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列しました。まず世界唯一の被爆者だけによる合唱団「ひまわり」の歌から始まり、新たに死亡が確認された被爆者の名簿が納められ、11時2分に黙とうをしました。田

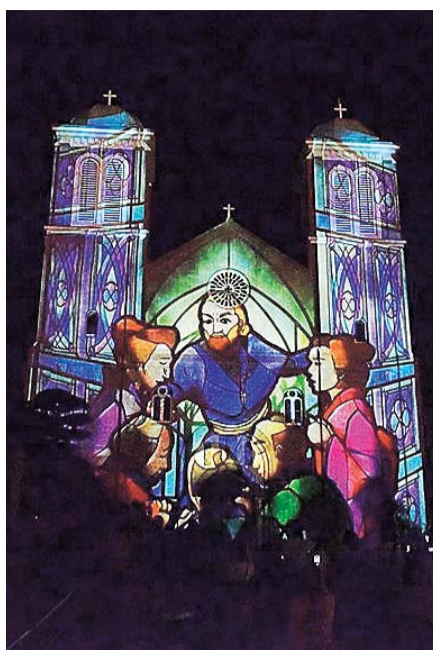
上長崎市長による「長崎平和宣言」が行われると同時に平和を象徴するたくさんの鳩が飛び立ちました。今年で被爆70年、この1年間で亡くなった被爆者は約3千人、今まで亡くなった長崎の被爆者の合計は約17万人にもなるそうです。

【渡邊寿音・幸子記者】

黙とうをしながら「今でも原爆で苦しんでいる被爆者がたくさんいるので、もう二度と戦争はしてはいけない、してほしい」と願いました。

豊かな時代だからこそ できる平和の継承

—「あの日」から未来へ—



建物などに映像を投影するプロジェクトで、被爆前後の浦上天堂を再現する、浦上天堂再現実プロジェクト(長崎市被爆70



深堀さん(右)と酒井さん(左)

周年記念事業)実行委員長の深堀暢師さんと酒井一吉さんの二人にお話を聞きました。二人は高校の同級生。東京で美術家として活躍している酒井さんは、二年前から被爆70年という節目の年に向け、平和の継承につな

るようにと考えてこの活動を始めたそうです。しかし、なかなか賛同が得られず、資金集めにも苦労したそうです。それでも、「戦争・原爆の辛い経験を伝えるだけでは、記憶の風化は止められない。豊かな今だからこそできる技術をプラスした方が記憶に残るのでは」と考え、頑張ってきたそうです。マッピングを実際に見て、形にすることの大変さを知りました。とても感動しました。

【榎木 秀斗・桂子記者】



国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で12月20日まで開催されている企画展「原子雲の下に生きて」

企画展で学んだ

戦争のつらさ

—「原子雲の下に生きて」—



本二夫さんに興味をもちました。原爆で両親とお兄さんを亡くした辻本さんは、おばあちゃんといつしよに暮らしていました。ぼくだったら元気がなくなり、家に閉じこもってしまうけど、辻本さんは立ち直り、学校が終わ

ると、おばあちゃんが採ったアサリを売って、そのお金でおばあちゃんの好きなおかずを買ってあげたそうです。ぼくは同じ経験はできないけど、学ぶことによって戦争のつらさがわかりました。

【仁井田 紘季・富佐子記者】



祈念館で智多館長に案内してもらいました



祈念館で平和のメッセージを書き込みました

劇で表現する 日常の平和

—未来に伝えたい原爆の理不尽さ—



つだけいこさん(右)

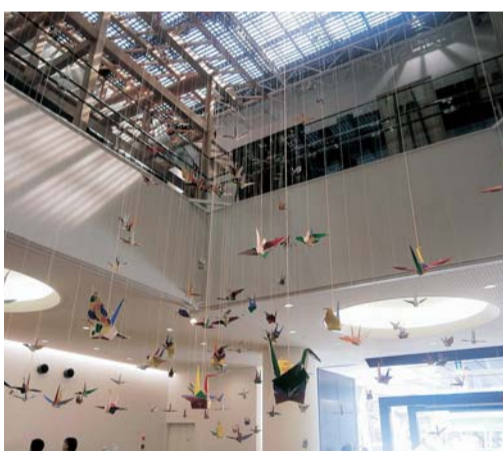
8月1・2日に長崎市のチトセピアホールで上演された演劇『明日』を制作されたつだけいこさんにお話を伺いました。つだけいこさんご自身は胎内被爆者で、妊娠8カ月で生まれてしまい、お医者さんに長くは生きる事ができないから名前をつける必要はないと言われたそうです。それでもつだけいこさんは元気に育つ事ができ、運動以外は普通の生活ができるようになりました。中でも本を読むことが好きで、その思いから現在の演劇の仕事についていらつしやいます。

被爆者の話を聞いて毎年夏には平和劇を制作されています。今年は原爆で普通の生活を突然奪われる理不尽さを伝えるために『明日』を上演されました。つだけいこさんは若い人たちに原爆の恐ろしさを知ってもらい、今の平和な日常生活を大切に過ごしてほしいと願われていました。

【渡邊 寿音・幸子記者】



祈りの折り紙 —平和を祈る—



会場の長崎歴史文化博物館1階ロビー

「祈りの折り紙 INORIGAMI展」を見に行き、デザイナーの中村圭太さんにお話を伺いました。

会場には、反戦、反核、平和のメッセージがデザインされた折り紙とポスターが展示されていました。折り紙は、折った後に開いた折り紙も一緒に展示してあり、中村さんは「このように折り鶴を新しい見せ方で展示



することで、見る人の目を引きたい」と話されていました。「折り鶴＝平和」というイメージしやすい表現にすることで、多くの人に平和について興味を持ってもらいたいそうです。ポスターには、戦後70年の長い歴史をイメージさせるものや、平



話を聞かせていただいた中村さん(右)

和への祈りをこめたものがありました。

これらの展示から、戦争の怖さや平和の大切さを感じました。多くの人にも見てもらいたい展示会でした。

【関森 日向・実紀記者】

山里小学校がのこしたもの

— 児童の思いをついで —



爆心地からもっとも近い学校の1つである山里小学校の原爆資料室に、取材に行きました。原子爆弾投下当日、32人が学

校にいましたが、生き残ったのは4人だけでした。その4人は、学校内にあった防空壕を広げる作業をしていたので、すぐににげこんでたすかりました。その壕は今でもあり、当時の様子を伝えていきます。資料室では、山里小学校出身のピースガイド、松田守さんに当時のことを教えてもらいました。山里国民学校(小学校)は、当時はまだめ



防空壕跡

リート造りだったので校舎がのこりましたが、当時の写真を見ると周りはなにもなく、改めて原爆のおそろしさをかんじました。戦争について、ぼくもつたえていきたいと思っています。

【藤井千裕・裕介記者】

被爆者のための研究を

— 放射線影響研究所をたずねて —



実験中のおよこ記者

8月9日、放射線影響研究所に行きました。ここは、原爆の放射線が体を与える影響を研究しているところです。年に

一度、8月8・9日に一般公開をしています。ここでは、被爆者と被爆二世の方の健康診断を定期的に行っている、細胞などをマイナス196℃の液体窒素で永久保存していました。風船やお花を液体窒素を使って瞬間冷凍する実験ができてわかりやすかったです。電子顕微鏡などを使って、白血病と病気になっていない血液を比べて見ることもできまし



放射線影響研究所外観

た。白衣を着て、いろいろな実験ができました。僕も大きくなったら、白衣を着て研究をして、人のためになる科学者になりたいです。ここでの長年の研究の積み重ねが、被爆者の方々のためになるといいなと思いました。

【石川空・玲緒奈記者】

山王神社の

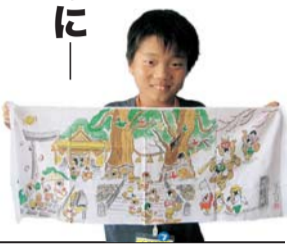
タヌキの手ぬぐい

— 後世につなげるために —

爆風を受けながら生き残った被爆クスノキも、病気の治療が必要で、山王神社では、タヌキの手ぬぐいを、お参りした人に売っています。その収入は後世に被爆クスノキを残すために使っています。



被爆クスノキ



原爆の被害で、山王神社の建物はなくなりました。残った燈籠も爆風でずれました。

一本柱鳥居(二の鳥居)は階段の上のせまい所にありますが、半分は、道路に横たわっています。一の鳥居は交通事故でこわれたらしいです。



残った柱(右)と倒れた柱・燈籠など(左)

放射線の恐怖

— 長崎大学 医学ミュージアム —



僕は、長崎大学医学ミュージアムの原爆医学資料展示室の橋本富士子さんにお話を聞きました。当時、旧長崎医科大学は、爆心地から約500mの場所にありました。学生、教職員合わせて898名が犠牲となりました。

原爆の被害には、爆風や熱線、放射線によるものがあり、核爆弾特有の放射線は、発熱や下痢、脱毛、白血病などを引き起こします。この大学では、放射線が人体にどのような影響をもたらしのかを研究し

ていて、世界の核実験や福島の事故などで放射線の被害を受けた人たちの支援をしています。放射線を浴びると、病気がかかったり、死んでしまうことがあるので、戦争はもうやめてほしいです。

【片山大輝・久美子記者】



救護所となった 新興善国民学校

— 皆を助けてと祈りながら —



救護所メモリアル内部の様子

長崎市立図書館内にある救護所メモリアル、かつてこの場所にあった新興善国民学校は、原爆でけがを負った多くの人が治療を受けた救護所でした。その記憶を後世に伝えるために、教室を再現したスペースや、運ばれてきた被爆者の写真、当時救護にあたった医師や看護師の証言などが展示されています。



【西澤優空・裕子記者】

「治療したくても、薬も消毒液すらもなく、海から海水を汲んできて煮沸したものを患者さんに

かけて回ったり、肉に食い込むガラス片を必死にとり続けることしかできなかった」と声を詰まらせながら語っていた看護師さんの映像がとても印象に残りました。これを見て私は、もう絶対に戦争はしてはいけ



目に見えぬ放射線の恐ろしさ —平和を願うナガサキからのメッセージ—



被爆体験を語る原田美智子さん

6歳の時に、爆心地から4kmはなれた場所で被爆した原田美智子さんに話を聞きました。家族全員が被爆した原田さんは長年、放射線による後障害に苦しんで

た体験を伝える活動をされています。被爆70周年の今年、アメリカ・ミネソタ州セントポール市でも被爆体験を伝える活動を行うそうです。アメリカでは、ヒロシマの被爆のことは知られていても、ナガサキのことは、あまり知られていないので、自分の体験を語ることで、ナガサキで何が起こったのかを伝え、平和の大切さ、原爆



もんぺと防空ずきん

の恐ろしさを核兵器をもつ国の人々にも知ってもらいたいそうです。

原田さんが言った「戦争は人の心が生み出す」という言葉が強く心に残りました。ぼくは、絶対に戦争はしていけないと思いました。

【藤井 千裕・裕介記者】

核兵器廃絶へ 長崎から 平和への思いを!! —パグウォッシュ会議—



わかりやすく教えてくれた鈴木教授(中央)

今年の11月にパグウォッシュ会議が長崎で初めて行われます。パグウォッシュ会議の評議員で、長崎大学核兵器廃絶研究センター長の鈴木達治郎先生にお話を伺いました。パグウォッシュ会

議とは、世界中の科学者たちが集まって、戦争と核兵器を無くすために対立を超えて話し合いをする会議です。今回、長崎で会議が行われるのは、とても大きな意義があります。一つ

は科学者や会議の関係者が被爆地長崎を訪れることによって、より核兵器廃絶への思いを深めた対話ができることです。取材をする中、大人も子どもも、どの国の人も、顔が見える友だちを作って、意見が違ったとしても対話をする事が、ぼくたちができる戦争を無くすための第一歩なんじゃないかと思いました。核弾頭数は減っていますが、核兵器と核物質は減っていないので、核兵器をなくしたいと思いました。

【石川 空・玲緒奈記者】

被爆の実相と平和の尊さを



証言活動について語る平田 周さん

語り継ぐことで 心に伝われば —次の世代につなぐ—

8月9日、「語り継ぐ家族の被爆体験」の家族証言者である平田周さんに話を聞きました。祖父と母が被爆者で、二世としてその体験を語り継ぐ活動をされています。

平田さんは、以前は原爆について無関心だったようですが、6年前に、俳人である祖父(松尾あつゆきさん)が原爆で亡く

した家族のことを記した日記が出てきたこと、オーストラリアに在住している娘さんの身近なところでテロが起きたこと、長崎の若者たちがしっかりと活動をしていることを知ったことなどがきっかけとなり、自分自身もみんなの前で家族の被爆体験を話したり、本を書い

たりしていきたいと思うようになったそうです。この活動を通して次の世代につないでいきたいのことで。平田さんのお話を聞いて、ご家族の被爆体験を伝えるのは、とてもいいことだと思いました。僕たちは、原爆を体験していないけど、みんなが考えるつらさはいつしよだと思えました。

【榎木 秀斗・桂子記者】



松尾あつゆきさんの句碑

自分で考え、人に聞くこと —核兵器廃絶のジレンマ—



天野貴暢さん(左)

長崎の被爆者やナガサキ・ユース代表団の大学生12名などで構成される「チーム長崎」は、今年4〜5月にニューヨーク

に行き、核不拡散条約(NPT)再検討会議で、条約がいつそう実行されるように訴えてきました。長崎大学大学院の天野貴暢さんは、「日本は核兵器を自らは持っているが、アメリカの核兵器の傘に入らなければいけないので、核兵器をなくす気持ちで十分には伝えられなかった」と、ジレンマに陥ったそうです。

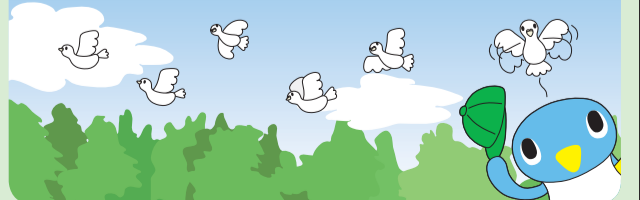
天野さんは、自分の言いたいことが伝わらない時は、泣きそうになるのをこらえて、もつと勉強し、自分で考えたり、人に聞いたりして、あきらめず何度もチャレンジすることが大切だと話していました。僕も言いたいことが伝わらない時は、逃げずに何度もチャレンジしたいと思います。

【石原 伶・亮記者】



平和へのメッセージ2015

長崎平和祈念式典に参列した方たちに、それぞれの思いをこめたメッセージを書いてもらいました。



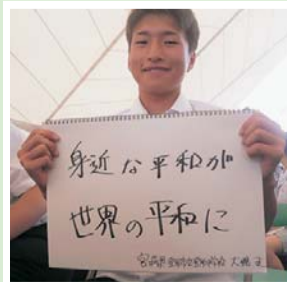
戦争はいらない、平和が欲しいと願うバングラディッシュからの留学生 【石原 伶・亮記者】



長崎に住むボランティア山口大輔さん 【石川 空・玲緒奈記者】



松戸市平和大使長崎派遣事業で訪れた田崎和さん 【西澤 優空・裕子記者】



宮城県から式典に参列した中学生の大槻圭さん 【関森 日向・実紀記者】

ニュージーランドの国会議員のシェーン・レティさんは、平和祈念式典に参列し「長崎の悲しい歴史を強く感じた」と話してくれました。ニュージーランドは1980年代から核兵器

世界を動かす 平和の願い

—長い歴史を忘れないで—



シェーン・レティさん(右)

に反対する取り組みをしております。国連安全保障理事会の一国としても世界平和に貢献できる活動をしています。また子どもたちは、今までに起きた戦争や、世界で今起きている紛争の事も学び、そ



「関森日向・実紀記者」

の歴史を若い世代へ伝えていく事が大切だと学校で教えられているそうです。そしてレティさんは「被爆体験や悲しい歴史を長崎や広島の人々から継承し、二度と繰り返さない事が世界平和へとつながるだろう」と話してくれました。私も平和への願いを広めたいと思います。



美帆シボさん

アニメで 平和を広める

—フランスから世界へ—

フランスに住む平和活動家の美帆シボさんは、30年にわたって原爆がいかに恐ろしいことかという事について伝えていく人です。

シボさんは「つるにのって」とも子の冒険のつるにのってというアニメを作った。いろいろな国で上映されています。またフランスの図書館で子どもたちとアニメを見て、一緒につるを折っています。子どもたちは家に帰ってつるを見せながら、親と一緒に平和について考えているそうです。



「仁井田 紘季・富佐子記者」

ぼくもアニメを見て、戦争がいかに怖いことかわかりました。世界には、まだ核兵器で守られていると思っている人たちがいます。ぼくは、核兵器は人を傷つけるものだから、世界にいらないと思います。

世界中へ届けよう

9日、国連合唱団のメアリー・アン・クルズ団長にお話をうかがいました。国連合唱団は、ニューヨークの国連本部の職員の方で作る合唱団で、メ



メアリー・アン・クルズ団長

歌を通して平和と喜びを

—子どもたちに伝えたい—

ンバーは40名、今回は、そのうち25名が来日しています。大きなコンサートは年に2〜3回ですが、病院や学校などで小さなコンサートは、毎月のように行っています。国連合唱団の目的は、平和を伝えること。80歳の言語で歌いますが、言葉がわからなくても、歌を通して平和や喜び、希望を感じてほしいそうです。



精力的に活動するキャサリン・サリバンさん(右)

「ヒバクシャ・ストーリーズ」活動の一環として、日本の被爆者の方をニューヨークの高校に派遣し、生徒に被爆の実相を伝えているキャサリン・サリバンさんと、そのメンバーを取材しました。

若い世代へ 核問題の 十分な理解を

—原爆の目撃者を教室へ—



被爆者の山下さん(右から2番目)

「西澤 優空・裕子記者」

サリバンさんは、「広島に比べて長崎のことはあまり知られていない」といいます。そしてメンバーの1人で長崎の被爆者の山下昭さん(昭子)は、「若い人が先頭に立つて核兵器をなくそうと動くことが一番大切な事で、その一つひとつが、いつか大きな動きになって世界へ広がっていくのだと思う」とおっしゃっていました。私も世界中の若者と手をつないで核兵器のない世界を作るために努力したいと思います。



「片山 大輝・久美子記者」

す。「特に戦争をしている国の子どもたちには、歌を通して戦争以外の楽しいこともあることを知ってほしい。そして、子どもたちに子どもらしい姿でいてほしい」と話していました。



宮城県の美里町立中学校2年生の皆さん

【片山 大輝・久美子記者】



長崎県諫早市から式典に参列した浦キミカさん

【石原 怜・亮記者】



式典参列のために長崎に来た東京都大田区長の松原忠義さん

【仁井田 紘季・富佐子記者】



長崎出身で東京在住。姉妹で参列されました。

【藤井 千裕・裕介記者】



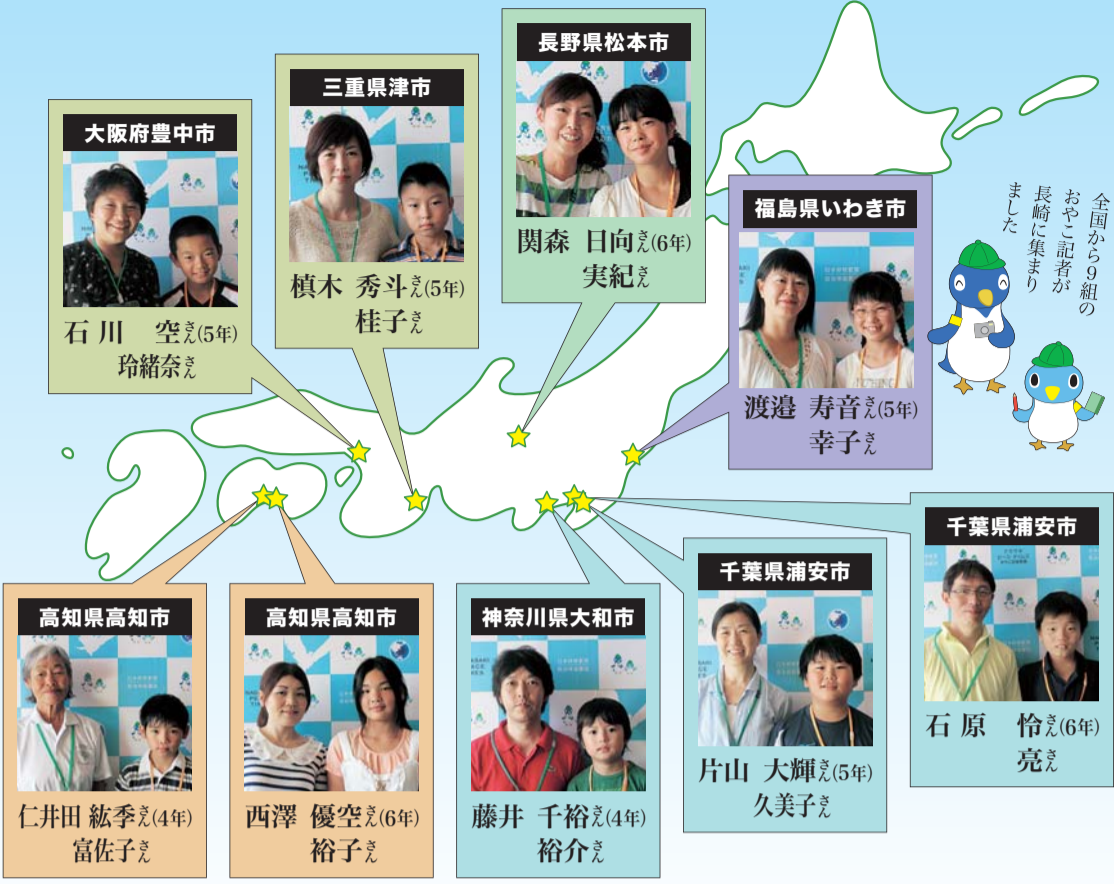
被爆クスの木がある山王神社の総代会会長・柴田英敏さん

【横木 秀斗・桂子記者】

ちのふるさとで 平和」 設や平和活動で学び、

- (1) 戦争を体験した方に話を聞いて考えたこと
- (2) 自分の住む地域の平和資料館等を訪ねて学んだこと
- (3) 自分の住む地域で平和を伝える活動をしている人に会って学んだこと
- (4) 家族で考えた「平和」について

このコーナーでは、おやこ記者のみなさんが地域で取材し考えた「戦争と平和」についてのレポートをご紹介します。【編集部】



全国から9組のおやこ記者が長崎に集まりました



東京都新宿区にある「平和祈念展示資料館」をたずねました。満州事変から第二次世界大戦にかけて、日本が海外・国内で戦争をした際の服や、持ち物などが展示してありました。長崎と広島や、各地で戦っている場所の画像を見



私は、戦争について祖父の友達、根本榮信さんに話を聞きました。根本さんは、お父さんが植民地政策の軍人だったので、終戦を北朝鮮で迎えたそうです。当時9歳だった根本さんは、手旗信号や薬人形を刀でさして足でける、手榴弾の使い方等、色々な訓練


千葉県浦安市 石原 怜・亮 記者

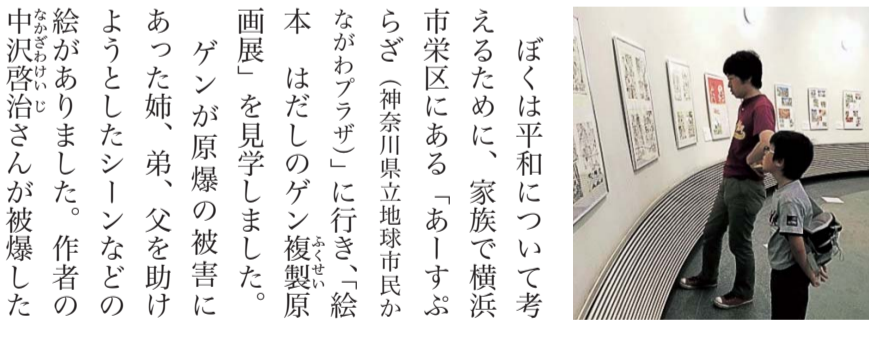
福島県いわき市 渡邊 寿音・幸子 記者

平和祈念展示資料館で学んだこと

て、戦争はやつちやいけ
ないと思いました。
資料館の企画展示コーナーでは、戦後シベリアの抑留者と家族をつないだ葉書について、研究者の山口隆行さんからお話を聞きました。「1945(昭和20)年8月15日に、戦争は終わったのではなく、まだずっと続いていく」との説明にはびっくりしました。当時の抑留者は家族からの葉書を持って帰ってはいけなかったもので、袖の中などに隠したそうです。これはよく考えた后感心しました。

祖父の友人から聞いた戦争体験

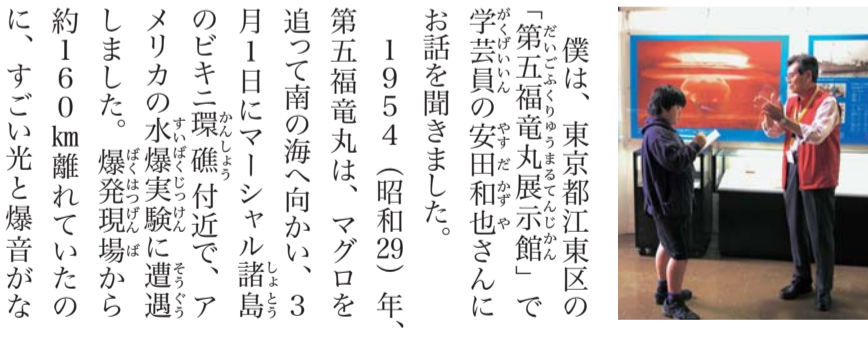
をさせられ、時には防空壕もつくりました。空を飛ぶ爆撃機B29を見るのは、とても怖かったと話す根本さん。
戦後は日本に帰国するため38度線を何日もかけて歩き、船に乗り長崎へ。その後、お母さんの実家がある福島へ行きまして。とても怖い思いをした根本さんは「戦争ほど恐ろしいものはない」と涙ながらに語りました。




神奈川県大和市 藤井 千裕・裕介 記者

原爆の恐ろしさを知る

ぼくは平和について考えるために、家族で横浜市栄区にある「あーすぶらざ(神奈川県立地球市民かながわプラザ)」に行き、「絵本 はだしのゲン複製原画展」を見学しました。ゲンが原爆の被害にあった姉、弟、父を助けようとしたシーンなどの絵がありました。作者の中沢啓治さんが被爆した
体験を元に描かれた漫画でした。
中沢さんが話している映像も観ました。原爆が落とされた後、体中の皮膚がむけてしまった人がたくさん歩いていて、おぼけの行進のようだったそうです。
原爆がどれだけ怖いかを知りました。落ちた瞬間に焼け野原になってしまいます。戦争は二度としてはいけなと思います。



千葉県浦安市 片山 大輝・久美子 記者

水爆実験の怖さ

り、しばらくして、放射能を含む「死の灰」と呼ばれるものが降ってきたのです。この灰は、体に色々な被害をもたらします。
最初の犠牲者となった久保山愛吉さんは、「原水爆の犠牲者は、私で最後になつてほしい」と言い残しました。
安田さんは、核兵器のことを「無差別大量破壊兵器」と言っていました。核兵器ですごい数の人が死んでしまうのはとても怖いと思います。ですから、そのようなことはもうなくなつてほしいです。



私は「松本市文書館」に行つて、特別専門員の小松芳郎さんに会い、松本市に残る戦争遺跡について話を聞いてきました。山の斜面を使って、空からわかりにくいように地下や半地下に軍事工場を建て、その中で飛行機やその部品をつくっていたそうです。私の住む地域

戦後70年。私た取材した「戦争と戦争体験談を聞き、平和施家族で「平和」を考えました

1945(昭和20)年8月9日の原爆投下の日から、長崎は70年の節目の年を迎えました。今年の日本非核宣言自治体協議会(非核協)主催のおよこ記者募集には、全国から225組の応募があり、抽選で選ばれたおよこ記者9組が参加することになりました。

およこ記者のみなさんは、長崎の取材に先がけて、それぞれの地域で「平和」について考え事前取材をしました。今回は次の4つのテーマからひとつを選択し、記事にまとめています。

長野県松本市

関森日向・実紀 記者

松本市に残る戦争遺跡



にもそのような場所があったなんて驚きました。また、信州大学に残る、旧陸軍歩兵隊の倉庫も実際に見に行つてきました。小松さんは「その時代を生きてきた人には、何かしらの戦争への思いがある」と言われ、どんな時代だったのかもつと戦争について知りたいなと思



7月17日に僕の住む地域の山原寛さんに話を聞きました。山原さんは僕の通っている庄内南小学校の1年生で、小学校1年生の時に終戦を迎えました。

空襲で空が真っ赤に焼けた事、操縦士の顔が見える高さで飛行機が飛び、銃弾を避けながら学校から帰ってきた事を聞きました。



大阪府豊中市

石川空・玲緒奈 記者

山原さんに聞いた戦争体験

びつくりしたのは不発弾がたくさんあった事です。寒くなると子どもたちが不発弾を分解して燃料を取り出し、暖をとりました。今年の春にも大阪ならばで不発弾の処理がありました。



7月4日の朝刊に、70年前の1945(昭和20)年7月4日朝、しよういだんで焼きつくされた、高知市の写真がのつていました。高知が戦争の被害にあつていたとは知りませんでした。

高知県高知市

仁井田 紘季・富佐子 記者

おばあちゃんに聞いた70年前の高知大空襲

レンが鳴ると防空壕の穴に逃げたこと、周りが火事で怖かったこと。今でもサイレンの音を聞くとその時のことを思い出すと話してくれました。でも普段の時には話をしません。おばあちゃんになつても忘れられない怖い思い出なんだと思いました。

三重県津市

榎木 秀斗・桂子 記者

戦争を知らない僕らが学び考えてみて

学校の丸橋かおり先生に話をしたら、みんな戦争や平和について考えてみようかと時間をとつてくれました。授業では「人の命を奪う事はいけない」「戦争はしてはいけない」とみんな同意見でした。何気なく過ごしている今の僕達はとても幸せなのだなど実感し、忘れてはいけないと思ひました。

私は「高知大空襲」という言葉を市内にある平和資料館「草の家」へ行つて初めて知りました。資料館には、空襲の後の高知市の写真やガスマスクなどが展示されていて、いろいろな方から話を聞く事ができました。



高知県高知市

西澤 優空・裕子 記者

草の家で調べた高知大空襲

私は今、毎日安心して暮らしているけど、戦時中はいつ空襲がくるかと恐怖心を持ちながら生活していたのだと知り、戦争がない事がとても幸せだと思いました。日本で戦争があつたという事を忘れずに平和について考えていきたいです。



編集 後記



事務局だより

戦後70年を迎えた今回、記者の皆さんはまず、各地域の戦争などについて調べました。戦争を体験した方が高齢化するなか、戦争を地域で若い世代に継承していくことがますます重要になっていきます。

長崎での取材では、記者は被爆者の方の話に涙し、また記事にするのに苦労して、やっと新聞ができました。協力いただいた皆様は御礼申し上げます。新聞を読む方に長崎の被爆の実相を知っていただき、ぜひ被爆地長崎を訪ねていただきたいと思います。

この新聞が鳩のぼばたきのように親子の気持ちをのせて皆様心に届きますよう、そして小学生の皆さんがクスノキのようにたくましく成長していくことを願っています。

事務局(長崎市平和推進課) 藤田 正明

福島県 いわき市

渡邊 寿音・幸子記者

長崎で学んだ平和

これまで戦争や平和について、全くといっていい



いほど親子で話し合った事もなく、私とお母さんにとって戦争は、とても遠いものだと思っていました。今回、平和祈念式典に参列し、取材をしているうちに改めて戦争は二度としてはいけない! 平和が一番だと感じました。この4日間の体験をより多くの人に伝え、世界平和が実現する事を考えていきたいです。

千葉県 浦安市

石原 伶・亮記者

国際×平和都市・長崎

平和祈念式典に初めて参列し、ご遺族から切なる思いを直接伺う機会に恵まれました。驚いた事は、外国人の多さです。世界各国から思いを一つに参加し、祈りを捧げる姿に感動しました。



国際都市・長崎の国際交流の歴史も世界平和の尊さに役立っていると実感しました。

神奈川県 大和市

藤井 千裕・裕介記者

学んだことをつたえていきたい

4日間、楽しく記事を書くことができ、勉強にもなりました。原爆のおそろしさや平和の大切さ、つたえつづけていきたいです。協力してくれたみなさんにとっても感謝しています。とくに、つきそってくれた学生ボランティアの竹口さんには



お世話になりました。この経験を一生わすれません。

長野県 松本市

関森 日向・実紀記者

平和を願って

初めて長崎に来て、原爆の怖さを知りました。平和祈念式典では、



被爆者の方の生の声を聞き、70年たった今でも後障害で苦しんでいる事も知り、胸が苦しくなりました。途中で鳩が放たれる場面があり、青空にはばたく姿が印象に残りました。これからも、戦争のない平和を願って、私たちに何か出来ることはないか、考えていきたいと思いました。

大阪府 豊中市

石川 空・玲緒奈記者

長崎発のメッセージが平和へのヒントに

僕は実験が好きだから、放影研や鈴木先生に色々教えてもらってよ



かったです。ボランティアの学生さんにも感謝! 今回は初めて長崎に来て、原爆の苦しい体験から平和のメッセージを世界に発信する被爆者の心を改めて感じました。この経験と感謝の気持ちを大切に自分ができる平和への行動をしていきたいです。

高知県 高知市

西澤 優空・裕子記者

平和の大切さ

長崎では、いろいろな平和活動がありました。



戦争、原爆について実際に目で見たり、話を聞いて過ごしたこの4日間は、私たちにとても大切な経験になりました。高知に戻ったら長崎で感じたこと、学んだことをたくさんの人に伝えていきたいです。

千葉県 浦安市

片山 大輝・久美子記者

嬉しかったメッセージ

4日間の活動を通して一番印象に残ったのは、国連合唱団団長の



続けて下さい。歌うと心が平和になります」とメッセージをもらい、とても嬉しかったです。

三重県 津市

榎木 秀斗・桂子記者

平和を知る大切さ

今までぼくは戦争や平和について全く知りませんでした。



今回インタビューをしてみても、話を聞くことやそれをみんなに伝えるために記事にすることが難しいことだとわかりました。戦争は、人々の全てを奪うものだとも思いました。

高知県 高知市

仁井田 紘季・富佐子記者

親子記者に参加して

この4日間は平和と戦争について学びました。最初に取材したのは美帆シボさんで、平和活動の輪を広げて、世界を平和にしようとするところがすごいと思いました。追悼平和祈念館でみたひばくした人の映像や館長さん



から聞いた話を、高知にもどったらたくさんの人に伝えたいと思います。

長崎の大学生13名がおやこ記者を全力サポート!



今年も長崎県立大学シーボルト校国際情報学部情報メディア学科の金村ゼミ生をはじめとする学生の皆さんに親子記者の取材や記事の作成のサポートをしていただきました。

- ♥(写真上段右より) 長崎にいなが知らないことの多さを感じました。 柳川智栄美
- ♥多くの想いを受け継いで伝えていかなければならない。 内野 惟
- ♥正しく「知る」ことが平和への第一歩だと思えました。 秀島 早紀
- ♥改めて平和について考え、新しい発見ができました。 山崎 千尋
- ♥あたり前になる毎日がすごく幸せな感じました。 荒木 風花
- ♥人と人のつながりが、「平和」へとつながる。 竹口美咲希
- ♥「平和の維持」は、一人ひとりの気持ち次第。 鬼塚 桃子
- ♥(写真上段右より) 「対立ではなく対話を」人間関係の構築こそ不戦への近道。 田中 寛明
- ♥被爆者の方々の経験を次は私たちの口で伝えていこう。 中村 茜
- ♥被爆者の平均年齢が高くなってきている今、このような活動が大切と感じてきた。 酒井 楓芽
- ♥平和こそが人間の心の最も奥底にある希望である。 浜脇 侑也
- ♥子どもたちが持つ平和の種は、やがて私たちの未来になって現れる。 松永 和真
- ♥今回のボランティアをきっかけに、平和に対しての想いを深めていきたい。 中道理紗子